

調査・事例報告

# 教員免許状更新講習受講後の松本大学に対するイメージの向上: 集団式潜在連想テストによる検証

守 一雄

Improving Schoolteachers' Conceptions of Matsumoto University  
After They Have Completed a Teaching Certificate Renewal Course:  
An Assessment Using the Group Performance Implicit Association Test

MORI Kazuo

## 要 旨

松本大学では教員免許状更新講習を行っている。講習終了後にアンケートで受講者による評価がなされているが、アンケートは必ずしも本心を答えるかの保証がない。アンケートの欠点を補う手法として、回答者の潜在連想構造を探ることができる「潜在連想テスト (Implicit Association Test: IAT)」<sup>1)</sup>が開発され、様々な研究領域で活用されてきた。本研究では、IATを集団で実施できるように改良したFUMIEテスト<sup>2)</sup>を用いて、受講者74名の「松本大」に対する潜在イメージを更新講習(必修領域)受講前後で測定し比較をした。その結果、松本大学に対するイメージは受講前から肯定的であり、受講後はそれがさらに向上したことが確認された。

## キーワード

大学イメージ    教員免許状更新講習受講者    集団式潜在連想テスト    学校教育教員

## 目 次

- I. はじめに
- II. 平成29年度「教育の最新事情(必修領域)」受講対象者の概要
- III. 受講者評価書の結果とアンケート調査の限界
- IV. 集団式潜在連想テストによる「松本大」のイメージの測定
- V. まとめ

文献

## I. はじめに

少子化が継続する中で全国の私立大学は学生定員の確保に苦労している<sup>3)</sup>。平成29年度に新設された松本大学教育学部も初年度2年度と学生定員の確保ができなかった。学生にとってより魅力的な大学となるよう、志願者を増やすための種々のイメージアップ対策が取られている。具体的には、テレビ等のマスメディアを使った大学の宣伝や、高校生や保護者を対象とするオープンキャンパス、大学教員による高校などへの出前講座や公開講座などである。

本報告では、こうした直接に受験生増を目指す活動ではなく、大学本来の研究や教育を充実させることで、大学の価値を高め、間接的にイメージアップができることを示したいと思う。例えば、受験生やその保護者、高等学校の進路指導教員に向けた直接的な大学の宣伝以外にも、大学教員の優秀さをアピールすることで間接的に受験生に大学のイメージアップができることを大妻女子大学の澤が報告している<sup>4)</sup>。澤によれば、大妻女子大学は所属する教員に対する全学的な科研費申請への支援体制によって科研費取得実績が向上したことで、高校の進路指導教員などが大学教員の研究レベルを高く評価し、結果的に受験者増につながったという。

以上のように、直接的にも間接的にも大学のイメージアップを図る種々の試みがなされてきているわけであるが、教員免許状更新講習(以下「更新講習」と略記)も、間接的な大学のイメージアップに関わる重要な事業の一つである。講習会を主催する大学教員の実際の講義や授業が体験できるという意味では、前述の出前講座や公開講座と似ている。しかし、出前講座などは無料で開講されることが多く、開講する大学側と受講する側とで「大学の宣伝」という位置づけが共通認識されている。これに対し、更新講習は「真剣勝負」である。大学側は講習を有料で提供し、受講者は6,000円程度の受講料を払って受講する。教員免許更新の可否に関わる合否判定がなされる試験も含まれる。授業料を払って受講する通

常の4年間の大学教育を「6時間だけ切り取った」ものとも考えられるわけである。受講する学校教員は、後述するように幼稚園から高等学校までの広範囲に及ぶため、高校の進路指導教員のように間接的とはいえ、すぐに受験生に影響するものではないが、学校の教員に良いイメージを持ってもらうことは大学にとって重要であることに変わりはない。そこで、この更新講習による松本大学のイメージアップの影響を検証することを本研究の目的とした。

松本大学教職センターでは、平成21年度から導入された教育職員免許更新制度(教員免許更新制)において、更新を希望する学校教員のための「教員免許状更新講習」を文部科学省の認定を受けて実施してきている。免許状の更新に必要な講習時間は30時間であり、そのうちの6時間はすべての受講者に必修とされ、更新の期間となる10年間における「教育の最新事情」をアップデートするものとなっている。この必修領域講習は、講習を担当する大学等がそれぞれ特色をもった講習を行うことになるが、文部科学省が定める内容を含むものとしなければならない。松本大学では、「教育の最新事情(必修領域)」という講習名称により、次のような概要の講習を2組の担当者によって2講習開講している。

最新の教育事情を大きく(1)子どもの発達に関する脳科学、心理学等の最新知見に基づく内容(特別支援教育に関するものを含む。)(2)子どもの生活の変化を踏まえた課題、多様化に応じた学級づくりと学級担任の役割、カウンセリングマインドの必要性(3)学習指導要領の改訂の動向等(4)学校を巡る近年の状況の変化についてに分け、2項目で3時間、計6時間の講座となります。

本報告では、報告者自身が担当した平成29年度の「教育の最新事情(必修領域)」の概要を述べ、実施が義務付けられている受講者評価書(アンケート)に加えて、報告者らが開発した集団式潜在連想テスト<sup>2)</sup>による「松本大」への潜在イメージの講習前後での測定結果について述べる。

## Ⅱ. 平成29年度「教育の最新事情(必修領域)」受講対象者の概要

教員免許の更新は免許取得後の10年ごとに行われる。そこで、平成29年度の講習受講者は、免許取得後10年、20年、30年という3つの年齢集団となる。更新講習は更新前2年間に受講することになっており、また、個々の教員の事情によって、免許状取得年齢が多少違うため、平成29年度の当該講習を受講したのは、「取得後10年」のグループとして1979-1984年生まれ(32-37歳)、「取得後20年」が1966-1974年生まれ(42-50歳)、「取得後30年」が1961-1964生まれ(52-55歳)であった。そのほかに、1987-1988年生まれ(29-30歳)の2名が含まれていたが、これは制度の改正によって栄養教諭も更新講習受講の対象となったためである。それぞれの年齢グループは、24名、22名、28名と全体(74名)のほぼ1/3ずつとなっていた。

受講者を学校種別にみると、小学校教員が20名、中学校教員が19名、高等学校教員が20名、とほぼ拮抗しており、そのほかに幼稚園教員(保育園、こども園を含む)が6名、特別支援学校教員が5名、栄養教諭などその他が4名であった。年齢と学校種とのバランスも同様にほぼ均等に分散していたと考えられる。

更新講習は全国で開催されており、どの講習を受講してもかまわない。そのため、大阪府、愛知県、山梨県の受講者がそれぞれ1名ずつ含まれていたが、基本的には長野県内の受講者であり、なかでも松本市およびその近郊から受講していた者がほとんどであった。

受講者の男女比は、女性が47名、男性が27名と、ほぼ2対1の比率で女性受講者が多かった。長野県の学校教育教員全体の男女比は55:45でやや男性が多い<sup>5)</sup>ことを考慮すると、当該講習には女性が多く参加していたことになるが、その理由は不明である。(なお、今回の分析対象ではないが、

平成30年度と同講習の男女比もほぼ1対2と女性が多く、本講習では女性教員が選択する傾向が高いのかもしれない。)

以上をまとめると、平成29年度の更新講習「教育の最新事情(必修領域)」の受講者74名は、男女比を除くとほぼ偏りのない平均的な長野県内の学校教員とみなすことができるであろう。なお、本講習では、4人ずつのチーム(2チームのみ5人)を作りディベートを行ったが、各チームは年齢、性別、学校種などができるだけ均等になるよう考慮した。「教育の最新事情(必修領域)」の講習時間は昼食などの休憩時間を除く正味6時間であった。平成29年8月8日の午前午後を使い、1日での講習となった。

## Ⅲ. 受講者評価書の結果とアンケート調査の限界

### 1. 受講者評価書とその結果の概要

更新講習では、文科省の定めに従って、受講者による講習の評価書を講習の最後に実施することになっている。受講者評価書の評価項目は「資料1」に示すとおりである。全部で12の評価項目のうち、⑥は講習の内容に関する5つの評価項目(①から⑤)を総合した「講習内容についての総合評価」であり、⑪は受講者がどれだけ学んだかに関する自己評価(⑦から⑩)を総合した「講習による自己研修の総合評価」である。そして、最終の⑫は「運営面の評価」となっている。受講者は、それぞれについて以下のような4段階で評定することが求められた。

- 4:よい(十分満足した・十分成果を得られた)
- 3:だいたいよい(満足した・成果を得られた)
- 2:あまり十分でない(あまり満足しなかった・あまり成果を得られなかった)
- 1:不十分(満足しなかった・成果を得られな

表1 平成29年度「教育の最新事情(必修領域)」受講者評価書の集計結果

評価項目	評定値4	評定値3	評定値2	評定値1	合計
⑥「講習内容についての総合評価」	52人	19人	3人	0人	74人
⑪「講習による自己研修の総合評価」	37人	35人	2人	0人	74人
⑫「運営面の評価」	53人	20人	1人	0人	74人

かった)

表1は、評価項目⑥「講習内容についての総合評価」、⑪「講習による自己研修の総合評価」、⑫「運営面の評価」について、上記4段階の評定の度数を示したものである。これら3項目についての評定結果は文科省への報告が義務づけられているものである。受講者74名のうちの大半(37-53名:50.0-71.6%)が評定値4「よい(十分満足した・十分成果を得られた)」を選択しており、評定値3「だいたいよい(満足した・成果を得られた)」を含めると95.9%以上が講習に満足していたことがわかった。

## 2. アンケート調査の限界

受講者評価書による更新講習の評価は大変望ましいものであったことがわかったが、手放しで喜ぶわけにはいかない。アンケート形式で回答を求めるような評価は、たとえ匿名で回答してもらった場合でも、「アンケートの実施者が望むような回答」をしがちであるからである。アンケートの回答のこうした歪みは、社会心理学などでは古くから知られていて「社会的望ましきバイアス(social desirability bias)」と呼ばれている<sup>6)</sup>。どう答えても「得にも損にもならない」回答なら、あえて否定的にするよりも寛容なものにするほうが気持ちよく回答ができるため、回答者は肯定的に回答しがちなのである。さらには、回答者は意図的に歪んだ回答をする可能性も排除できない。例えば、この受講者評価書は講習終了時に匿名でなされ、「本評価は今後の

免許状更新講習の改善と更新講習に関する情報提供のために行われるものであり、あなたの履修認定に係る評価には一切影響を与えません(資料1に示すように、下線つき)」という説明を明記した上で実施された。しかし、「履修認定に係る評価」がなされる前であり、学校種や職名の記載欄もあり、匿名性の保証が十分であったとは言えない。「不合格」とされる可能性が皆無ではない状況で、評価される側の受講者が講習に対して否定的な回答をすることは躊躇われることが十分予想できる。実は、同年度に開講された別の講師による同じ「教育の最新事情(必修領域)」における受講者評価書の集計結果も⑥「講習内容についての総合評価」⑪「講習による自己研修の総合評価」とも「評定値2」は84名中2名「評定値1」は0名とほぼ同様の結果であった。つまり、こうしたやり方での受講者評価から得られる情報はほとんどないに等しい。

アンケート形式での受講者評価には他にも問題点がある。講習後の評価だけでは、講習によって大学のイメージが向上したかがわからないからである。更新講習は松本大学だけでなく、長野県内では信州大学などでも開催されている。松本大学での受講を選んだ受講者は、もともと松本大学に対して比較的良いイメージを持っていた可能性がある。過去に松本大学での同様の講習を受講した同僚教員などの勧めがあったかもしれない。良いイメージを持ち、良い講習であることを期待して受講した結果、期待通りの講習だったとしたら、大学への良いイメージは維持されるだろうが、それがさらに良いものとなったかどうかはわからない。

松本大学に対してどのようなイメージを持っているかを講習開始前にアンケート調査しておき、同様の調査を講習後に再度行うことで、イメージの変化を測定することにすれば、この問題は解決できるであろう。しかしながら、仮にそうした事前事後アンケートを行ったとしても、前述の「社会的望ましきバイアス」などの影響は排除できないままである。

## IV. 集団式潜在連想テストによる「松本大」のイメージの測定

### 1. アンケートの問題点を排除できる調査方法：潜在連想テスト

アメリカの社会心理学者グリーンバルドらは、アンケート調査の持つ問題点を解決するための新しい社会的態度測定技法として、「潜在連想テスト (Implicit Association Test)」を開発した<sup>1)</sup>。潜在連想テストは、認知心理学者によって研究されていたプライミング効果 (priming effects) に注目し、測定対象となる概念 (例えば「黒人」と「白人」) の分類と、善悪の評価分類課題 (「良い意味」と「悪い意味」) とを組み合わせると、測定対象となる概念の分類のための反応時間に100ミリ秒程度の差が生じることを活用したものである。例えば、回答者が「黒人」と「白人」に対してどんな潜在的態度を持っているかを調べるとすると、黒人と白人の顔写真や、黒人や白人に特徴的な名前を分類する課題を実施する。パソコンの画面上に黒人か白人の顔写真 (名前) を提示し、黒人ならばキーボードの「Q」を左手で、白人ならば「P」を右手で、できるだけ速く押すことを求め、内蔵するタイマーで反応時間をミリ秒単位で計測する。さらに、画面上に単語を提示し、その単語が「良い意味の単語」か「悪い意味の単語」かの分類課題も行わせる。この課題でも、「良い意味」なら左手で「Q」を「悪い意味」なら右手

で「P」を押すよう求め、同様にタイマーで反応時間を計測する。潜在連想テストでは、この2つの分類課題を交互に行わせることで、2つの課題の干渉によって生じる反応時間への影響を計測するのである。このとき、2つの課題の反応キーの組み合わせを入れ替えることで、「黒人／良い意味」と「白人／悪い意味」の分類組み合わせと、「黒人／悪い意味」「白人／良い意味」の分類組み合わせとを遂行させると、回答者の「黒人／白人」に対する潜在的な連想構造によって、前者の場合の方が反応時間が速くなったり、反対に遅くなったりすることがわかる。これを逆に考えると、反応時間の違いによって、回答者の潜在的な連想構造の違いを知ることができ、それは回答者の「黒人／白人」に対する潜在的態度を反映したものになるというわけである。

潜在連想テストは、回答者が意識的に回答を歪めることが難しく、結果的にアンケート調査の難点を解決するものとなった。そのことから、潜在連想テストは社会心理学だけでなく、心理学の幅広い領域で活用されるようになり、その有効性が研究者によって認められてきた。また、開発者らによって実施手順などの改良も加えられ、現在ではアンケート調査の問題点を補完する手法として最も広く用いられる測定手法となった。

しかし、潜在連想テストの実施のためには、回答者にパソコンの操作が求められるために、集団での実施は困難である。また、実施時間も30分程度かかるため、アンケート調査のような簡便さに欠ける難点がある。そこで、守ら<sup>2)</sup>は潜在連想テストと同じ原理を活用しつつ、パソコンを使わずに紙とペンだけで集団で実施ができるような「集団式潜在連想テスト」を開発した。このテストは「FUMIEテスト (Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions Test)」と名付けられ、特に学校現場で広く活用されている。FUMIEテストの詳細、活用例、および「実施マ

ニュアル」については、内田・守<sup>7)</sup>を参照いただきたい。

## 2. 集団式潜在連想テストの実施

本報告では、このFUMIEテストを使って、更新講習の前後で受講者の松本大学に対する潜在イメージがどう変化するかを測定することとした。FUMIEテストでは測定対象となる「ターゲット語」として「黒人／白人」のように対になったものだけでなく、「数学」などを単独で用いることができる。そこで、本研究では「松本大」という単語を「ターゲット語」とすることとした。標準的なFUMIEテストでは、評価語として「成功」「幸福」などの良い意味を表す単語と、「失敗」「不幸」などの悪い意味を表す単語が用いられている。そこで、ターゲット語もこれらと同様の2文字熟語であることが望ましい。しかし、「松大」という略称はまだ定着しているとは言えないため、「松本大」という3文字表記を用いることとした。

FUMIEテストは、標準的な実施手順<sup>7)</sup>にしたがって、講習の開始前と終了後のそれぞれ5分間を使って実施した。また、実施にあたっては、同テストが回答者の潜在意識を探るものであり、回答を希望しない場合には回答しなくてもよいことを告げた上で、回答結果をデータとして提供することに同意する方だけにテスト用紙の提出をお願いするという「インフォームド・コンセント」の手続きを取った。

FUMIEテストの標準的な手続きは、以下の通りである。FUMIEテスト用紙はA3サイズ(横長)に、「成功」「失敗」などの評価語のみがランダムに60語並んでいる「練習行」が印刷されている。さらに、その下には、良い意味の評価語と悪い意味の評価語とターゲット語の「松本大」の3語がランダムな順序で20セット分60語並んだものが12行分印刷されている。回答者は、それぞれの行について、20秒間にできるだけ速く「良い意味

の単語には○、悪い意味の単語には×をつけること」が課題とされる。また、「松本大」については、行ごとに○をつけるか×をつけるかの指示が出される。

FUMIEテストの原理は、「松本大学に肯定的なイメージを持っている人は○をつける課題の方が×をつける課題よりも認知的な処理が容易であるために、○をつける行の方が課題遂行量が多くなる」ことである。逆に、「松本大学に否定的なイメージを持っている人は×をつける課題の方が遂行量が多くなる」ことが予想できる。そこで、「○をつけるよう指示をする行」を3行分、「×をつけるよう指示をする行」を3行分、どちらも60秒分(20秒×3行分)遂行させ、その遂行量の差を調べることで松本大学に対する潜在的イメージの測定ができることになる。(テスト用紙には12行分の課題が印刷されているが、実際に使うのは半分の6行分だけである。これは、「最後の1行」であることを知ると「終末努力」が生じることを防ぐために、まだ課題が残っている状態で作業を打ち切るためである。)[○をつけるよう指示をする行]の遂行量から「×をつけるよう指示をする行」の遂行量を引き算すると、肯定的なイメージを持つ場合は正の値となり、解釈がしやすい。ただし、単なる差ではなく、差を全体の遂行量で除し、100倍することで「潜在連想指数(IAQ<sub>100</sub>)」を最終的な指標とする。これは「課題を100語分行った場合に、○をつける課題の方が×をつける課題よりもどれだけ多くの単語の分類ができるか」を示すものである。

## 3. 「松本大」の潜在イメージの講習前後での変化

受講者総数は74名であったが、「インフォームド・コンセント」の手続きによりデータ提供に同意した者は、事前調査で63名、事後調査で64名であった。調査は匿名で行ったが、事前調査と事

表2 受講者の「松本大」に対する講習前後での潜在連想指数

潜在連想指数 IAQ <sub>100</sub>	事前	事後
平均値 (N = 60)	2.78	5.08
標準偏差	5.09	6.00

後調査との対応づけのために、「受講者番号」か(特定されることを望まない場合は)「秘密の言葉」を用紙右上に記入するよう依頼した。それを用いて回答者の対応づけをしたところ、事前事後両方の調査に参加した受講者は60名であった。そこで、これら60名について以後の分析を行った。

FUMIEテストの標準的な分析手続きにしたがってIAQ<sub>100</sub>を受講者ごとに算出した。表2は、講習の前後でのIAQ<sub>100</sub>の平均値と標準偏差を示したものである。この結果から、受講者は講習開始前から松本大学に対して肯定的な潜在イメージを持っていたこと、講習後にはその肯定的な潜在イメージがさらに肯定的になったことがわかった。この結果を1要因の分散分析してみると、講習後の潜在イメージの向上は統計的にも有意であることがわかった( $F_{(1,59)} = 9.74, p < .05$ )。また、効果量 $f$ も0.41とかなり大きいこともわかった。

潜在連想指数の平均値は有意に上昇したが、個人レベルでは、60名のうち41名が上昇させた一方、19名が下降させていた。これは、パソコン版の潜在連想テストと違って、FUMIEテストの個人レベルでの信頼性はどうしても低くなりがちだからである。しかし、この結果をノンパラメトリック検定した結果も統計的には有意に上昇が多かったことを示していた(サイン検定 $p = .0062$ )。

## V. まとめ

少子化による18歳人口の減少傾向が続き、大学は入学者の確保に相当の努力が必要となっている。そのためには大学のイメージアップによ

て、受験生がより魅力を感じてくれるような大学になることが必要である。松本大学でも、大学のイメージアップのための種々の取り組みをしてきているが、本稿ではマスメディアやインターネットを活用した直接的な大学の宣伝活動ではなく、大学の本来の研究や教育によって大学のイメージの向上ができることを示した。

具体的には、より良い更新講習を行うことによって、学校教員の受講者の持つ松本大学へのイメージを向上させられるかどうかを、松本大学に対する潜在イメージの変化を測定することによって検証した。対象となった回答者は平成29年度に更新講習「教育の最新事情(必修領域)」を受講した74名のうち、調査に協力することに同意した60名であった。これらの受講者に対して、講習の前後に集団式潜在連想テスト(FUMIEテスト)を実施したところ、受講者は講習前から松本大学に対して肯定的なイメージを持っており、講習後にはそのイメージをさらに向上させていたことがわかった。

受講者は学校教員であったが、高校教員の割合は3割程度であり、大学イメージの向上が直接に大学受験生に影響力を持つわけではない。しかし、長い目で見れば、こうした地道な大学の活動を通して松本大学のイメージを向上させていくことは受験生の増大につながっていくことが期待できる。

## 謝辞

本稿で報告した平成29年度教員免許状更新講習「教育の最新事情(必修領域)」は、松本大学教育学部教授武者一弘先生と共同で担当しました。講習の前後にFUMIEテストによる松本大学の

潜在イメージの測定を行うことにご協力いただいたことに感謝申し上げます。また、本講習を受講し、講習時間外にFUMIEテストを2回することにご参加くださった受講者の皆様にも深く感謝申し上げます。平成29年度に同じ必修領域の更新講習を担当された松本大学教育学部教授川島一夫先生、同教授今泉博先生には、同講習に対する受講者評価書をご開示いただくことに快く同意していただきました。両先生に感謝申し上げます。表1に示した受講者評価書の集計は松本大学教職センター事務の田嶋哲也さんが行ったものです。ここに記して感謝の意を表します。

#### 文献

- 1) Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1464-1480. doi: 10.1037/0022-3514.74.6.1464
- 2) Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. (2008) A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, 40(2), 546-555. doi: 10.3758/BRM.40.2.546
- 3) 小川洋(2016)『消えゆく「限界大学」:私立大学定員割れの構造』白水社
- 4) 大澤清二(2017) 科研費獲得に向けた環境醸成と支援体制づくり～「科研塾」の実際/Do と Don't ～地域科学研究会・高等教育情報センター主催セミナー 高等教育活性化シリーズ 353(通算684回)「“審査システム2018”への対応——科研費改革の進展と申請・獲得方策」日本教育会館(2017年9月13日)
- 5) 長野県教育委員会「平成22年度学校教員統計調査」  
<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku02/gyose/zenpan/tokei/kyoin/h22.html>
- 6) Paulhus, D. L. (1991) Measurement and control of response biases. In J. P. Robinson, et al. (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes*. San Diego: Academic Press. doi: 10.1016/B978-0-12-590241-0.50006-X
- 7) 内田昭利・守一雄(2018)『中学生の数学嫌いは本当なのか:証拠に基づく教育のススメ』北大路書房

## 資料1

様式第5号

## 免許状更新講習受講者評価書

開設者	松本大学	受講期間	平成29年8月8日
講習名	教育の最新事情		

本評価は今後の免許状更新講習の改善と更新講習に関する情報提供のために行われるものであり、あなたの履修認定に係る評価には一切影響を与えません。

◎あなたの所属する学校種・職名・担当教科等について記入してください。

学校種		職名		担当教科等	
-----	--	----	--	-------	--

◎以下の質問項目のあなたの評価について、評価基準の1～4の該当する番号を□にご記入ください。評価の基準は以下のとおりとします。

- 4：よい（十分満足した・十分成果を得られた）  
 3：だいたいよい（満足した・成果を得られた）  
 2：あまり十分でない（あまり満足しなかった・あまり成果を得られなかった）  
 1：不十分（満足しなかった・成果を得られなかった）

① 学校現場が直面する諸状況や教員の課題意識を反映して行われていた。	
② 講習のねらいや到達目標が明確であり、講習内容はそれらに即したものであった。	
③ 受講生の学習意欲がわくような工夫をしていた。	
④ 適切な要約やポイントの指摘等がなされ、説明が分かりやすかった。	
⑤ 配付資料等使用した教材は適切であった。	
⑥ 本講習の内容・方法についての（上記の①～⑤の視点を踏まえた）総合的な評価	
⑦ 教職生活を振り返るとともに、教職への意欲の再喚起、新たな気持ちでの取り組みへの契機となった。	
⑧ 教育を巡る様々な状況、幅広い視野、全国的な動向等を修得することができた。	
⑨ 各教育活動に係る学問分野の最新の研究動向、これまでの研修等では得られなかった理論・考え方・指導法や技術等を学ぶことができ、今後の教職生活の中での活用や自らの研修での継続した学習が見込まれる。	
⑩ 受講前よりも講習内容への興味が深まり、教員としての知識技能の厚みや多様さを増す一助となった。	
⑪ 本講習を受講したあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての（上記の⑦～⑩の視点を踏まえた）総合的な評価	
⑫ 本講習の運営面（受講者数、会場、連絡等）についての評価	
⑬ 感想を自由にご記入ください。	